

健康の医学教室

身近な病気や
症状について、
東北大学医学系教授らが
最新情報を伝える



[テーマ] 女性のがん
～ならないために知っておくこと～

東北大学災害科学国際研究所
災害産婦人科学分野

教授 伊藤 潔 さん

1986年東北大学医学部卒業。米国
ジョージワシントン大学、ヴァージニア
医科大学客員研究員、東北大学産
科学分野准教授などを経て、2012年か
ら現職。災害医学研究部門長も兼務。専
門は婦人科腫瘍学、災害医学など。



増加する女性のがん 早期発見、早期治療を

ワクチンで予防

最近、女性特有のがんである子宮がんや卵巣がんが増えています。子宮がんには、子宮頸(けい)がんと子宮体がんの2種類があります。

子宮頸がんは子宮の入り口にできるがんです。かつては年配の方に多く見られましたが、最近では25歳から44歳がピークになっています。問題なのは20代前半の女性の発症が増えていることで、ここ5年間で約2倍になっています。原因はヒトパピローマウイルス(HPV)で、性的接触で感染します。HPVはありふれたウイルスで、女性の多くは一生のうち少なくとも一度は感染するといわれています。ほとんどは一過性で、発症の確率は感染した人の0.1%ぐらいです。

子宮頸がんは予防できるがんで、約7割はワクチンの接種で予防できます。既にある病変を治したり、進行を止めたりする効果はありませんので、ワクチンを受けても検診は必要です。

生活習慣が影響

子宮体がんは欧米に多く日本人の発症は少ないといわれていましたが、この10年の間に2.3倍に増えています。50歳代、60歳代に多く見られ、肥満の人や、高血圧、糖尿病などの病気を持っている人の発症リスクが高くなっています。

子宮体がんは初期の段階で不正出血を

起こします。早期発見のためには一般的な子宮がん検診を定期的な受け、ちょっとした不正出血などの変化があれば、隠さずに医師に相談してください。

卵巣にできるがん

卵巣は子宮の両側にある親指大の臓器で、卵子を蓄えて育てると同時に女性ホルモンを分泌する働きがあります。卵巣にできる腫瘍には良性のものと悪性のものがあり、がんと診断されるのは約10%程度です。近年非常に勢いで増加しており、50歳代がピークになっています。

直接の原因は分かっていませんが、閉経が遅い、家族に病歴がある、チョコレートのお胞があるといった人に、発症の確率が高くなっています。卵巣がんになるとお腹が張って体重が増え、便秘、頻尿、腰痛の症状が見られます。進行すると食欲がなくなり体重が減少してきます。

卵巣がんは不正出血の症状がほとんどないため発見が難しく、手遅れになりがちです。治療方法は進歩していますので、腹部の張りが気になったら、早めに婦人科を受診してください。



「2014年3月13日付“河北ウイークリーせんだい”より許可を得て転載」